



「しゃくなげ」のお話

◇みなさん、この切手に見覚えはありますか？平成二年の花の万博のとき発行された、全国四十七の県花をデザインした記念切手の一つですが、この滋賀県花の「しゃくなげ」切手は、香川のオリーブ、京都の桜とともに御三家と呼ばれ、現在、マニアの間では、もっとも高い値段が付いています。

◇しゃくなげは滋賀県の県花です。日野の鎌掛(かいがけ)にある鈴鹿国定公園内には、約二万本のしゃくなげの群生地があり、昭和六年に国の天然記念物に指定されました。比良山系のしゃくなげも有名で、井上靖の小説に「比良のシャクナゲ」があります。花の見頃はいずれも春のゴールデンウィークの頃です。

ちなみに県の木はモミジ(紅葉)、県の鳥はカイツブリ・別名鳩(にお)。

◇しゃくなげは、俳句では夏の季語です。

石楠花の色濃くなりぬ朝の雨

緒方輝

1

◇しゃくなげはツツジ科の常緑低木で、数多くの種類がありますが、派手で大きな花が特徴です。しゃくなげの葉にはロードトキシンという毒性があるとところから、その花言葉は「警戒」「危険」です。吐き気や呼吸困難を起こすこともあり、注意が肝要です。

◇しゃくなげの名所として、県外では奈良の室生寺が挙げられます。長谷寺の牡丹と季節が重なるので、シーズンになると、この両寺を訪れる風流人は跡を絶ちません。



滋賀県

その今は：

【人口】約一四〇万人で、静岡県の三分の一以下。しかし、他県の人口が増えていない中であって、滋賀県は五年前に比べ3%増加しており、「将来推計人口」が増加すると見られる、全国でも数少ない県として、沖縄県とともに語られることがある。

【知事】嘉田由紀子(かだゆきこ)五十八歳、環境社会学者で農学博士、学究にしては美人。二〇〇六年七月の選挙では、「もったいない」を合言葉に、自・公・民などの推す対立候補をおさえて当選を果たした。異色の女性知事の誕生であるが、古い滋賀県人としては、この人を選んだ滋賀県民の変貌ぶりに驚かされる。

【財政】平成二〇年度四〇〇億円の財源不足が見込まれ、財政は危機的状況にあると云う。財政の厳しさなら日本中の各所にあるが、質実な近江商人の伝統はどこへ？

【市町村合併】合併特例法の趣旨に則り、これまでに左記の合併が実現した。

甲賀市⇨水口町・土山町・甲賀町・甲南町・信楽町

野洲市⇨中主町・野洲町

湖南市⇨石部町・甲西町

高島市⇨マキノ町・今津町・朽木村・安曇川町・高島町・新旭町

東近江市Ⅱ八日市市・永源寺町・五個荘町・愛東町・湖東町・蒲生町・能登川町
 米原市Ⅱ山東町・伊吹町・米原町・近江町
 長浜市Ⅱ長浜市・浅井町・びわ町
 愛荘町Ⅱ秦荘町・愛知川町

【高校野球】夏の大会(甲子園)出場校は次の通り、近江高校の健闘が際立っている。



二〇〇八年 近江
 二〇〇七年 近江
 二〇〇六年 八幡商
 二〇〇五年 近江
 二〇〇四年 北大津(初出場)
 二〇〇三年 近江
 二〇〇二年 光泉(初出場)
 二〇〇一年 近江(3年ぶり8回目)
 二〇〇〇年 八幡商(9年ぶり5回目)
 一九九九年 比叡山(2年ぶり7回目)

甲子園のお膝元である近畿地方にありながら、滋賀県は近畿勢で唯一、いまだに優勝経験がない。二〇〇一年夏、近江が滋賀県勢初の決勝進出を果たしたが、決勝戦で日大三に敗れて準優勝に留まった

湖水と湧水



細野 豪志(衆議院議員・近江八幡出身)

エコバック、リサイクル、そして地球温暖化・・・。

政治の主要課題、そして地球規模の課題となった環境問題ですが、私にとっては少年時代の琵琶湖の記憶が環境問題の原点です。

ものごころがついた昭和五十年代前半、田園地帯であった近所の環境は激変しました。モロコヤフナが釣れた小川は、コンクリートで固められた次の年に、ヘドロがたまったドブになりました。琵琶湖から取る水道水は、年々カルキ臭くなっていききました。粉石鹼を使う条例が制定され、滋賀県民が立ち上がったのはその頃です。

今年、私は三十七歳を迎えます。近江八幡で過ごしたのは高校までですので、人生の半分以上を滋賀県外で生活したことになります。ただ、今でも環境と聞いて考えるのは、子供達に田園風景や、きれいな水を残してやりたいということです。原体験とは、こういうものかも知れません。

三島での生活も間もなく九年になります。ここに住んでよかったと思うのは、富士の湧水の恵みを感じたとき、そして清流を守るために絶えず努力を続ける人々の、姿に接したときです。

故郷である滋賀県では、「もったいない」を掲げた知事が誕生し、環境問題への取り組みが、盛んになっているようです。帰省して、子供と一緒に川釣りができる日が来るかも知れません。

江州弁メモ（方言は国の手形）

滋賀県は中央部に琵琶湖が位置するために、琵琶湖をはきんで微妙な言葉の違いが存在するほか、琵琶湖に面した地域と琵琶湖から離れた山間地、農村部と都市部などの間でも差異が存在します。

これらの違いを大まかに区分すると、湖北方言（伊香郡・東浅井郡・長浜市・米原市）、湖東方言（彦根市・犬上郡・愛知郡・東近江市・近江八幡市・蒲生郡）、湖南方言（野洲市・守山市・草津市・栗東市・大津市南部・湖南市・甲賀市）、湖西方言（高島市・大津市北部）の四種類に分けられるのだそうです。

これからの例会で、具体的にどんな例があるか、楽しみながら確認していきたいと思いますが、手始めにこんなのはいかがでしょう。

せんどする くだびれる、の意。仕事を千度するように疲れる、ということらしい。

湖北には「おせんどさん（お疲れさん）」という挨拶言葉があるという。

もりこす 湯水が容器から溢れること。「漏れる」と「超える」が合体したものと考えられている。

このさきやかな会報を、長く続けたいと思います。発行は不定期です。

「しゃくなげ会」は滋賀県好きの人たちの望郷サークルですが、みなさんの郷愁に思いを馳せつつ、会報作りをしています。どこかで滋賀県とつながるお話を、どんどんお寄せください。文章など下手でも粗野でも結構です。未整理の原稿でも、こちらで塩梅して記事にします。

実は私にとって、こういう会報を作ることは、故郷の思い出につながります。昭和二十六年、十五歳の頃、私は神崎中学校（現・五個荘中学校）で発行する「神中新聞」の編集長でした。校内や地域の情報を求めて、放課後の時間を費やしたことを懐かしく思い出します。それから五十五年の歳月を隔てて、今この富士山の地で、故郷への想いをみなさんとともに会報の形にしていきたいと思います。原稿は左記へお寄せください。

また、都合で例会に出席できず、会報のみご希望の方は、返信用封筒をお送りください。

〒410-0874 沼津市松長九二一―六一―〇〇三 「しゃくなげ会報」発行所

三上 八郎



近江の名句 ① 三上 八郎（五個荘出身）

また一人遠くの芦を刈りはじむ 高野素十

びわ湖畔の芦刈の風景は、古来俳人に愛され続けて今日に至っている。

中でも、東岸に西の湖という小さな湖があり、汀の近江八幡市円山一帯に広大な芦の群生地が広がっている。背丈三倍近く伸びた芦は、すっかり枯れるのを待って刈り取られ高級製品に化ける。素十（すじゅう）のこの句、遠望の一人の動作を描写することで、大きな水郷の大空間をとらえたものとして、名句の誉れが高い。

「方丈の大庇より春の蝶」の名吟で知られる高名な俳人ならではの、卓抜の省略技法とされている。

滋賀の味 ① 「日野菜漬け」



日野菜は近江蒲生野で育つ細い大根のようなカブで、赤紫の美しい野菜です。

滋賀県以外にも栽培する地方があるのは、戦国時代から江戸時代にかけて、蒲生氏の果たした役割が大きく、転封先の伊勢松阪、伊予松山、会津若松にも根を下ろしています。

近江商人、とりわけ日野の売薬商人も種子を行商先に広め、漬け方まで教えました。ついでに行商の途次、山形で捨てていた青菜を「もったいない」と漬物にしてみました。のが「おみ漬け」で、質素儉約を旨とする近江商人の面目躍如たるものがあります。

日野菜漬けは滋賀県にはなくてはならない漬物ですが、最近では静岡県のホームセンタ―にも種子が売られており、簡単に作れます。

日野菜漬けは、ぬか漬けでも、塩漬け、酢漬けでも美味で、食物繊維と乳酸菌の豊かな健康食品でもあります。



湖国奇談

I

「三上山の大ムカデは嘘ではなかった」

古事記にも記載がある野洲の三上山（近江富士）は、平安中期の武将、藤原秀郷（ふじわらひでさと）が、大ムカデを退治した伝説で有名である。秀郷は「平将門の乱」を鎮めたほどの豪傑で、三上山を七巻き半もする大ムカデを、弓矢で成敗したことになっているが、その程度のムカデなら今でもちよいちよい出沒すると、土地の古老は事もなげに話す。

それもそのはず、七巻き半というのは八巻き（鉢巻）にはちよつと足らぬ、ということ、平安人の壮大なユーモアに過ぎないのである。三〇センチ程度のムカデなら、滋賀県の田舎では、大して珍しいことではないのである。



近江恋々(1)

久田 二郎 (歌誌「寸信」主宰・永源寺出身)

その土地を離れると、生まれ故郷を恋い慕うのは普遍的な感情であろうか。私にとっても此の思いは深い。

滋賀県蒲生郡(神崎郡→東近江市)に育った頃を時々思い出す。小学校2年生迄のことだが、当時のことは今も多く記憶にある。

いちばん古い記憶は何んだろうと考えた。もちろん後から聞いたことだが、4才から5才の冬、急性肺炎にかかった。母は私を抱えて虎姫の町まで人力車を走らせた。車のホ口の隙間から吹き込む粉雪のことを、かすかに覚えている(ような気がする)。

これは確かな記憶だが、秋頃の早朝、戸外の便所へ出ようと表戸を開けた。すると、軒下に馬が繋がれていて、そばに兵隊が一人、外套を被って寝ている。私は驚いた。いま思えば、大津の歩兵連隊の秋季演習だったのだろう。ふだん馬は見ない。農耕は牛だった。

村の八割以上は農家だったようだ。その家では居室に隣り合わせて牛が居た。夏など、外から表戸を開けると、蚊の鳴く声が高く聞こえた。囲炉裏になま木をくべて蚊を払っていた。私の家では土間に井戸があり流し場があった。夏は井戸に西瓜が漬けてあり、ツルべを手繰り上げる母の手元を見つめたものだった。

土間から部屋へあがる境いに釜場があって、大きな釜二つと鍋が一つあった。ここをオクドサンと云った。(次号へつづく)

老年暴走族だより



〔I 定年後〕

平田文一(近江八幡出身)

昭和三十年、東京は亀戸の自動車教習場で免許の取得をしてより、五十三年になります。七十歳になったら免許証を返納するつもりのところ、なんのなんの、七十二歳の今も盛んに乗り回していて、これまでに走った距離は六十万キロと自称しています。

半分は仕事、半分が遊びですが、六十歳定年の際の送別会の話題も、わたしの場合、車の話し一色で、現役時代を通し公私ともにいかに車中心の生活をしてきたか、思い知らされました。そしてもう自由の身である今は、札付きの老年暴走族となっています。

定年後の十二年間に、車は三台目となり、走行距離は十八万キロを超えるでしょう。

東は仙台あたりから、西は生れ故郷の滋賀を通して、倉敷方面にまで足を伸ばします。

人より早い時間に出発し、人より早く戻ることを徹底し、渋滞に巻き込まれることはありません。

私の長い運転歴で、事故は一度だけ。千葉県で四十年前、雪が降り出した夕方のことでした。相手が当方の進路に入り込んできた正面衝突で、左足膝骨折、右目周り損傷で三ヶ月入院しましたが、退院後の現場検証で百%相手の過失と決まりました。

あと三年で後期高齢者になりますが、運転の定年は肉体年齢ではなく、判断力や瞬発力で自ら判断するつもりです。

これからまだまだ素晴らしい景色や、風俗や、味覚を楽しむつもりであり、郷里の滋賀県をはじめ、旅先での具体的な経験をご紹介したいと思います。(次号へ続きます)